

JIC では、今夏ロシア・ウラジオストクの極東連邦大学でロシア語研修旅行を行いました。参加者は 7 名。8 月 12 日に羽田から北京経由でウラジオストクに飛び、8 月 27 日に全員無事帰国しました。滞在中は、平日毎日 45 分×4 コマ×10 日間＝計 40 コマのロシア語授業を受け、授業以外にも博物館見学やロシア料理作り、ロシア人学生たちとの交流会など多彩な文化プログラムを体験して、参加者の皆さんから「充実した研修旅行だった」との感想を多くいただきました。

以下は、参加者の一人、早稲田大学の岡田陽奈さんから寄稿していただいた体験記です。「ロシア語漬け」の 2 週間はとても刺激的で、楽しい毎日だった様子がよくわかります。

なお、JIC では来夏もウラジオストク極東連邦大学でのロシア語研修ツアーを計画しています（編集部）。

「ウラジオストク・ロシア語研修旅行」

心の海に灯台を

岡田 陽奈（早稲田大学 学生）



東方経済フォーラム(9月)の会場準備が進む極東連邦大学

はじめてのロシア

右を見ても左を見ても 360 度ロシア語が飛び交い、空港の案内板にはキリル文字が踊る。送迎バスの車内ラジオからは、ヴィソツキーの歌声が聞こえてくる……。大学でロシア語を学び始めてから 4 年、ついに現地に降り立ったときの感動はひとしおだった。何よりも、ロシア語が使われている国が本当にあるという事実を目の当たりにして不思議な感覚に包まれた。旅行中は毎朝目覚めるたびに「今、私はロシアにいる！」と思い出しては、ひとり喜びを噛み締めていたほどだ。

ロシア文学を専攻し、ロシアの詩や小説に親しんできた私は、日本にいながらもロシアという国を身近に感じていた。しかし勉強を続けるにつれ、一度は「ロシア語漬け」の世界に実際に身を置いてみたいと思う気持ちが強くなっていった。そこで今回、ウラジオストクの極東連邦大学での 16 日間のロシア語研修に参加する巡り合わせとなった。

1 日のすごしかた

午前中の授業はすべて、研修参加者の 7 名のみで行われた。主に会話の授業が中心で、担当のナターリヤ先生は発音が難しい単語などもお手本を示しながら丁寧に指導してくださった。授業で扱う題材は衣食住などの身近な話題に始まり、ロシアの昔話や子ども向けアニメーションを用いての読解・音読練習など多岐に渡った。また、ほとんどの授業内容が同じ日の午後に観光プログラムで出かける場所と連動していたため、実践的に学ぶことができた。たとえば、沿海州水族館へ行く日には水族館の歴史や海洋生物の名前を勉強し、サファリパークへ行く日には街のシンボルであるアムール・トラについて学ぶ。午前中の授業で得た知識をその日にすぐに使ってみることができる環境は、ロシア語をロシアで学ぶ醍醐味だった。



ウラジオストクのランドマーク、トカレフスキー灯台

午後には毎日のように街へ出かけていた。研修中は参加者 7 名で常に行動を共にし、仲を深めることができた。大学提供の観光プログラム以外にも自由時間にはそれぞれが行きたい場所を提案し合い、遊園地やマトリョーシカ専門店、ジョージア料理店などを探索して街を満喫した。私も渡航前からぜひ行ってみたいマリンスキー沿海州劇場をリクエストし、全員でオペラを観に行った。観劇した全四幕のオペラ『アイダ』は、映像を用いた現代的な舞台装置も相まってとても見応えがあった。本場ロシアでオペラを観るといふかねてからの夢を叶えることができ、心に残る思い出となった。

文化をめぐって

研修中には、現地極東連邦大学の学生さんたちと交流をすることも楽しみの一つだった。それも単に同年代というだけでなく、日本の文化を学んでいる日本語学科の学生さんたちだ。実際に 4 年生の方が研修のサポーターとして常に同行してくれたほか、様々な学年の方がボランティアとして授業や観光に付き添ってくれた。いざ話をしてみると、彼らの日本語を話す力の高さには驚きばかりだった。皆、見事に日本語の独特な言い回しを使いこなしている。翻って、同じくら

いの期間ロシア語を勉強しているはずの私の会話力はどうか、.....と思わずにはいられなかったが、彼らの姿を見て大いに刺激を受けた。

会話の内容は様々だったが、「ロシア人では」「日本人では」など、お互いの国の文化の話では盛り上がった。特に印象深かったのは、日本人の「一人旅」が話題に上がったことだ。ロシアでは、旅行は友達か恋人、家族と行くものだけれど、日本人は敢えて一人でいることを選んで出かける。それはなぜか、という。改めて聞かしてみると説得力のある理由がなかなか出てこず、みんなで頭を捻って意見を出し合った。そこから話は、ロシアと日本の「友達」の定義の違いへと広がっていった。ロシア語には、日本語のように顔見知り程度の知人を含めた広い意味での「友達」を指す言葉がない。代わりに друг という単語が日本語での「親友」にあたる言葉として使われている。実際に学生さんたちに聞いてみても、друг と呼ぶような存在は1人か2人という意見が多かった。お互いの文化をめぐる話は尽きず、毎日誰かの持ち寄った話題で盛り上がった。街を散策しながら、バスを待ちながら、あるいはホテルで誰かの部屋に集まってお酒を飲みながら。観光や買い物もよいけれど、そんな風にあれこれと話をすることは何よりも楽しいのだった。

話しかけられる

「ロシアではよく人に話しかけられる」という噂は本当だった。それも、一度ではなく何度も。ある日、極東連邦大学の海を見に行った時の出来事だ。大学のキャンパスは海に続いており、構内を歩いて行くとビーチに出る。私はそこで波の音を聞くのが好きで、滞在中は何度も散歩に行っていた。その日もビーチに座り、日本から持参した文庫本を開いて読書に耽っていると、ふと背後に人の気配を感じた。振り返ると、サングラスをかけた四十代くらいの男性が私の本を覗き込んで一言。「読めないなあ、なんの本を読んでいるんだ？」日本語独特の縦書きが珍しく映ったのだろう。そのとき持っていたのは、ロシアの作家ゲルツェンの『過去と思索』の日本語訳だったので、原題の記してあるページを見せると納得したようだった。一目で気さくだとわかる男性はそのまま隣に腰掛け、私と会話を始めてくれた。「ウラジオストクには何をしに来たのか」、「どこに観光に行ったか」、「ロシア語はいつから勉強しているのか」と質問をしてくれる。お互いにひと通り自己紹介を終えると、ボリスさんというその男性は「ロシア語の勉強に来たのなら、話す練習をしよう！ なにかぼくに質問してみて」と、すすんで私の会話練習に付き合ってくれた。私が時々ロシア語が聞き取れず困っていると、「今言ったことは分かった？」と確認し、易しい表現に置き換えて話してくれる。突然始まったおしゃべりは、そんな風にして意外にも長く続き、別れ際には何度も振り返って手を振ってくれた。

思いがけないおしゃべりの思い出はほかにもある。ある時、買って来たパンを電子レンジで温めようと、ホテルの共用スペースに向かった。人ひとりがやっと入れるくらいの小さな部屋には先客がいたので、私は外で順番を待っていた。その男性はすぐに順番を譲ってくれたのだが、まだほかにも温める物があったのか、そのまま部屋にとどまっている。そして私がレンジの出来上がりを待つ間に話を始めてくれた。「お互いどんな食べ物を温めに来たか」という話題に始まり、なぜか男性がその前日に中華料理を食べた話になった。男性は「友達と昆虫食に挑戦したんだ」と嬉しそうに話しては写真も見せてくれた。電子レンジの出来上がりを待つ間の二分ほどの出来事だったけれど、私にはそんなわずかな時間でも話をしようと思ってもらえたことが予想外に嬉しかった。

さらにほかにも、朝食時と昼食時に利用したホテルの食堂では、「食堂のおばちゃん」たちと毎日顔を合わせるうちに、研修の参加者全員が仲良くなった。最終日にはおばちゃんたちを含めてみんなで記念写真を撮ったほどだ。ひとときだけれど温かい出会いの連続は、私にとって忘れられない出来事になった。人見知りで、普段は自分から知らない人に話しかけることなど決してできない私にはなおさら衝撃的だった。見ず知らずの私に話しかけてくれた一人ひとりを、ずっと覚えておきたいと思う。



(左) 食堂のおばさんと、(右) 野外研修の一コマ(写真提供: 井口茉莉花さん)

思い出が灯る

ウラジオストクのランドマークであるトカレフスキー台について授業をした時のこと。先生があることわざを教えてくださいました。У каждого в море есть свой маяк! 直訳すると、「すべての海には灯台がある」という意味だが、転じて「人間一人ひとりにはそれぞれの居場所がある」という意味になるのだそうだ。私には、この言葉がどこか今回のウラジオストク研修を象徴するように思えてならなかった。灯台は、昼間は広い海にぽつんと立っただけの存在に思えるけれど、夜になると光を発して船に自分の位置を知らせる大事な役目を担っている。この旅で出会った先生や学生さんたち、そして一瞬の時を共有したおしゃべり好きの人たちとの思い出は、私の心の「居場所」の一つとなった。沢山の素敵な人たちとの出会いはまさに「光」であり、ことあるごとに思い返しては私を支えてくれるだろう。ウラジオストクに立つ灯台はあの場所から、今度は私の心の海も照らしてくれるに違いない。(おかだ・はるな)